

COSMOS集



原賀 瓊子選

「あすなる集」特選

本が見つかる

松 井

奏*茨 城

プリウスのテールランプに照らされてアスファルトから足がとれない特別なことは何もやってないその返答はひどいじゃないの友人の家で見つけた恋愛もの読みたいけれど気付かないふり自室から出ずに過ごした一日はなんだか凄く悲しく暗い
所で今出てくるんだよ無くなつて買いなおしてた本が見つかる

ジャンプ

福 島

健太郎 神奈川

改札に孫を迎ふる映像を今年も見をり正月なれば
することの思ひつかない日日を雲から雲へとジャンプしてをり
冬晴れを旅する雲との夢なればアツピア街道松並木見ゆ
老いたれば何があるべき待つことの今朝も天よりラインのとどく

いづこより来たるアヒルぞバスタブに浮かびてツンとわれの手をつく

電話ボックス

三 宅

尚 道 神奈川

寅さんも釣りバカもなき映画館に「すずめの戸締まり」妻と観てをり
ケータイを止めて気になる公衆の電話ボックスどこにもあらず
元日に弾丸ミサイル発射され日はまた昇り日はまた沈む
デジタルの時と気温と湿度まで表示はされて一月の雨
外出の用はなけれど夕べには海を眺めてコンビニへ行く

動物霊園駐車場

荒 川

ゆみ子 東京

息子より年下になつた道造の生涯全集六冊なりき

失くしもの、クルマトンボに転生し風の後にすいとあらはる

四匹の兄弟の内が一番に痩せてる仔犬が私を見てた

哲学堂動物霊園駐車場 そこからほかりと空が見えたり

見えぬ目で昼空仰いでゐるやうな雄蕊摘まれたカサブランカよ

火 の 面

奥

呂美生 東京

たいまつでどどの山に点火せり佐須の小さき年男たち

書き初めの半紙の文字の「お正月」おから消えゆくほのほの中へ

くべられし竹の爆ぜたる音さえて静けさに充つどどのほのほ

かけあがる煙は天に届かんとどどの火の面踏みてのぼれる

どんど焼き山は崩れて灰となり土にかへりし門松かざり

水上 比呂美選

寒に入る朝 杉沢千恵 東京

吹雪く海に大き鮪を追ひ求むる一本釣の漁師逞し
津軽の海大間の鮪漁競ふ船は大きく揺れて危ふし

フリーズドライの七草入れて冬陽差すテーブルにひとりの粥を味はふ
らふ梅のはや咲き初むと言ふ便り風冷えびえと寒に入る朝
夕つ方差す陽は伸びて五時近くビルのうしろに大き陽の落つ

あかひげ 和泉邦子 新潟

店員がささと並べる「あかひげ」の句を買うたり朝のデバ地下
信濃川阿賀野川汽水の「あかひげ」はサクラエビ科の新潟の海老
夜の海の浅きに遊ぶ「あかひげ」が今朝は漁師の網に引かれ来
ひげ長く透きとほる小海老「あかひげ」をシヨリシヨリと食ふ新潟の冬
寒ざむとわびしき菜の「あかひげ」を珍味とぞ食ふ老いたる今は

人生百年 山本竜作*新潟

霜降りて草枯れゆくも一株の深山飯子菜の紅き花咲く
八十越えれど老人会には入らない歌・詩吟 囲碁を楽しむ生さる
ヤクルト飲み散歩をしては歌を詠むただそれだけで心が満ちる
子供のころ農家ではみな味噌玉を囲炉裏に吊した杵餅搗いた
人生百年歌・詩吟あり愛恋あり岡井隆のごとく生きなむ

みそなはせ 菊池むつ江 長野

りゆうりゆうたる太枝白くひびわられてこの家の主は汝なれハイビヤクシン
正月は銘仙のお対の着物着られるがなんほうれしかつたか
かの晴着の地味な色柄いま思へば生ひ先見こしの親心かも
塩鮭とさんぴららと酔だこさへあれば不足なき昭和のむかし
餅花の繭と俵をかもぬにさすはるかなる祖おやみそなはせとて

雅楽の調べ 高橋光子*静岡

恩師への近況報告は毎月のコスモス誌上の3頁、4頁
厨にはお割烹前掛けの妣が居て手綱こんにやく矢羽根蓮根
大鍋のきんとんこっそり舐めし日よ広き厨に包丁の音
ぬるま湯で重箱洗う早や二日漆の扱あい孫娘に伝える

祝箸テーブルに並べ餅を焼きポリウム上げる雅楽の調べ

鈴木 竹志選

さばさば捨てる 高橋みどり*愛知

両耳にピアスの穴を穿つ朝「教師」の我をさばさば捨てる
車椅子に乗りたる君と押す我と我の背中を押す南風
信じれば夢は必ず叶うよと励ます我の面倒くささ
まだ知らぬ異国の冬もときめきの一つとなりて湯たんぽを買う
元日のドラッグストアに一箱のティッシュを買って今年もひとり

モロコの苦味 森本順子*兵庫

三年ぶりの新年会のうれしくて背伸びして待つ紅梅咲き初む
佃煮に炊いたモロコの一びきの目が我を見る尻尾をたてて
おいしいねのその一言が聞きたくて好みの友等にモロコ持ちゆく
晩酌にモロコの苦味が旨いのと一本追加の銚子がならぶ
おはようの声かけだけで温もりの空気が届く霜柱の朝

干支の置物 青木淳子鳥取

としどの干支の置物飾りゐし父のならばし引き継ぐわれは
うつすらと埃まとへる置物の虎をぬぐひて一礼をする
玄関を開ければ父が持ちてゐむ灯油の臭ひこもる初冬を
のど飴の匂ひがすると金柑の甘露煮つまみ鼻寄する子は
命あるやうで長年仕舞ひたる大皿エイツと捨てて年の瀬

これぞ正月 小谷優香*鳥取

ひさびさに十六名の親族集い食べ呑み笑うこれぞ正月
近ごろは「ばあば」と呼ばず「ゆかささん」と我を呼ぶ孫ちよつと新鮮
立て札に持つて帰んさい好きなのだけ子育て広場に柿が山盛り
庭園は絵画のようで作業着の黒き庭師もその一部なり
『象の眼』の自分を「オレ」と詠む歌に男気感ずオクムラ短歌

ウメモドキ 畑都*鳥取

帰省せし孫らに揃えし湯たんぼは箱入りのまま積み上げてあり

孫たちが引き揚げいつもの暮らしなり雑巾絞り床拭きをする
昼寝のまま逝つてしまひし九十の叔父の庭にはウメモドキ実る
幼き日「お菓子の家」の本呉れし棺の叔父に感謝を告げる
もみじ葉の新芽はハサミの形して春待つ小鹿の蹄のごとし
水上 芙季選

への字との字 池内祥子*愛媛

焚火の輪に言葉は要らぬかざした手はしなやかゴツゴツあかぎれ輝もあり
六つ切りのレモンは意志があるごとくお皿の上で煌めき放つ
瀬戸内の島々茜に染めながら寅年最後の太陽沈む
はり越しに日向ぼこする猫二ひきへの字との字寝顔安らか
さらさらと真夏のような人でしたまだお喋りをしたかったのに

霜柱鳴る 猿渡紀美子福岡

ドリツプより滴り落ちるコーヒーの香り広がる休日朝
初詣神社の長き列にをり見上ぐる木々の間まの青い空
参道の芽吹く桜の彼方には熊本城のしかと在りたり
畦道に足踏みすればジャキジャキと霜柱鳴る春待つ朝あした
正月の朝の温泉もあもあ湯気なめらかに体を滑る

サンマ船 吉田静子長崎

年賀状今年が最後と筆とれば九十八歳指先ふるふ
サンマ船県に唯一の漁船なりマル井水産は長崎のほこり

長崎に戦後を七十二年住む生あるうちに新幹線さぬ
雨のなかブルーインパルスの機が描く初めてみたり亡夫にみせしたし
幾そとも軍艦浮ぶ佐世保港に今だ頭ちくる兄らの姿

じいちゃん 田島 寿恵延*大分

八合目あたりが紅く染まりおりくじゅう連山衣替えの季
大空におおはくちようが舞うようにゆうゆうと飛ぶグライダー二機
二歳半がじいちゃんと呼ぶ動画に向き「おう」と答える四度も五度も
「百姓は地面をはって生きるんだ」父の声、顔ふいにうき頭つ



藤野 早苗選 「その二集」特選

水色の空 成田 裕子*青森

雪べらの重さを腕に感じ見る雪の晴れ間の水色の空
ただ縦に真つ直ぐ降る雪見つめてるこんがらかった心の私
手順一つ材料一つ省略し自分のために焼くパンケーキ
物業を買わない決意鈍らせる土曜の昼の揚げたてメンチ
タイトルは微かに読める日付はもう読めぬ半券あの時君と

妻殺しの動機が介護づかれとは四十年の二人をおもう

ドア越しの子 川越 三紀子*宮崎

瑞々しいレモン籠よりつぎつぎと光る幸のごと転げ出て来る
つやつやのレモンを中に女四人輪になり声上げじゃんけん勝負
「ズル休みしてる気分」とドア越しの子の鼻声にひとまず安堵す
お隣も斜向かいもようやくと明かりが灯る三が日過ぎ
重箱も屠蘇器も夜具も片づきて炬燵に丸まる靴下ひとつ

ときめき 岩館 澄江*東京

めくるめく中央線の思い出がとおりすぎゆく青梅特快
送別のポーナストラックかなしくて こんなに褒められたのは初めて
自己中な欲が出てくる前にすぐ祈りにふたをする初詣
あの人の世界に入りたくなくておすすめされた曲をかけたよ
結婚にときめきはもう要らないと友はキリリとわたしを諭す

指のかじかみ 清水 美里*東京

蝶結びできない子供だったこと思う今年もサンタとなりて

赤いリボン整えている暗き部屋サンタを信じる子供のために解説を読み聞かせしが「この部屋で自決」から先声に出せない同じチラシ二枚郵便受けにあり配れる人の指のかじかみ原付の名義変更するために伴侶亡くしたひと欠勤す

糸 切 歯 富 永 弘 東京

サンドイッチマン勤めて夜を学びたる君歳晩に逝きてしまひぬ東洋文化研究所に君勤めぬき酔へばとことん陽気になりて入院の妻を長女が引き取ると言へりしばらく任せてくれと固ければ鯛の甘露煮湯に戻す歯に自信なき齢となりて糸切歯抜くよと告げる医師の声そんな可愛い歯があつたのか

時間の使い方 松下 誠 一*東京

大学の入学式のととき買ったズボンを腕力で履き終える懐かしい呼び方をされるとミニアキヤットのような表情になる来賓の方の紹介 これは新成人のためではないターン自治会の会長による獅子舞を見るところという時間の使い方地域センターでみる獅子舞としてあつてはいけないキレをしている

松尾 祥子選

殺 処 分 金子 英 子*新潟

高校生男子が作る雪だるま三段重ね六尺超える夕食のおかずの作り方をきく次男は今春家を出ていく

大粒のはらこがころがり落ちるほどこはんにかけて匂を味わう防護服二重に着込みバスに乗る作業の場所は知らされぬまま鶏たちの生についての思考止め殺処分する手順進める

あつあつの肝吸 山田 一 弥 岐阜

タクシーを遠くで降りて秋の夜の満月見つ家路をたどる友からの喪中はがきに妻「くし日々買ひ食ひとありてせつなしもんじや焼き試さむとして酒粕を酒「白鶴」に浸して寝かす切落しの刺身買ひ来て醬油漬け軽く炙りて酒のあてにす年の瀬の昼の鰻屋あつあつの肝吸飲みて上着脱ぎたり

縄文人の末裔 権田 陽子 静岡

「井川線星雲列車」は午後五時にミルクィ・ウェイをめざし発車す風花は駿河の国の冬景色 中空に舞ひ中空に消ゆ手のひらに受けし雪虫たちまちに儂くなりぬ冬雲の下流れくるバンドネオンに心躍る縄文人の末裔なれど音を立てず頁を繰れば図書館にこほんと響く咳払ひひとつ

ブルーブラック 高田 圭*静岡

少しだけ鮮やかすぎてしまう青ブルーブラックという選択肢鈍色の雲がぐぐつとそそり立つ遠州灘は吹雪いているか雪雲と雪をはこんで来た風がそのまま雪をはこんでゆけり病院に洗濯物を取りにゆく 老いたる母の体臭うすし 老い父と二人ですごす元日の朝にはみたる餅入りの汁

暴 力 小 田 沙也加*愛 知

チエーホフの戯曲を挙げて連続とつづく人生のなぞり方
透明なネットワークが絡めとる友情 終電はまだ来ない
激情の演技は舞台裏までもひびいて終わらせるには早い
プライドを捨ててくるべき場所だから学習塾はほんのり暗く
固まった砂糖を崩す 暴力は誰にもちいさく備わっている

大野 英子選

黒 豆 の 艶 浦 木 妙 子*鳥 取

退職し日ごとに主夫になる夫は録画を見ながら黒豆を炊く
青空の夫が干したる白きシャツ脇腹くねらせヒップホップ踊る
本当はタイプだったと告げぬまま四十二年を同居中なり
今年こそ少し良きことありそうな庭の花柚子ひかりを集む
元旦の夫の祝辞を聞きながら黒豆の艶にうっとりとする

これで乗り切る 舛 岡 慶 子*広 島

亡き母に瞳の似たる猫まめを抱きて坐る仏壇の前
雪中の土より掘り出す人参はみずみずしくも淡いオレンジ
寒冷紗をつぶした雪の重み耐えほうれん草の緑あざやか
おみくじの「捜しもの出ない」を思い出しあきらめ早く捜すのやめる

寒波にて自作スヌード首に巻き今年の冬はこれで乗り切る

パブリックコメント 増 田 柳 子*福 岡

ウクライナに日本が贈る発電機 寒き人らを温め癒やせよ
有事となり物流止まれば自給率3・8割のニッポン飢える
乳量を減らせば補助金出すという国は酪農も潰しにきてる
はじめてのパブリックコメント投稿す名前、住所、電話を明記し
里芋の煮ころがしを作りつつ遠くに住む子の夕食を想う

野母崎の水仙 日 高 能 子 長 崎

春の陽に映えてほころぶ白梅は凛々として気品ただよふ
野母崎の水仙とどく一抱へ香りを活けて姿を活けて
白波が沖の彼方で碎け散り小型漁船が波の間に消ゆ
どんよりと有明海は吹雪して車窓の眺め墨絵のごとし
新年は来客の無き静けさにお手玉六個作るよろこび

その包み紙 小 森 田 より子*熊 本

クレインが鉄板つり下げゆつくりとマリオネットショーは始まる
どうしても眠れぬ夜はゆつくりと深呼吸してしかばねポーズ
吾が歌の載りし新聞裏面に連敗正代うなだれている
二日分五人のソックス畳み居る神経衰弱するがごとくに
菓子折が送られて来て礼状の封筒とするその包み紙